

中島敦 「文字禍」論

— その成立過程について —

安 福 智 行

はじめに

一 「ノート第六」の抜書について

二 文章化されたものの比較

三 創作資料の成立時期

四 創作資料の度重なる見直し

おわりに

この作品には、「文字」という題名の付いたものと、付いていないもの（「ノート下書」）の二種類の草稿がある。これまでの研究では、その成立過程は、「ノート下書」↓「文字」↓「文字禍」と捉えられてきた。本稿では、様々な創作資料の成立時期を明らかにすることにより、成立過程がかなり複雑であることを証明した。また、二度の改稿に際して、創作資料や、その原典である英文資料をもう一度見直して、本文に引用するなど、作者の資料に対する〈こだわり〉が伺える点も、併せて指摘した。

はじめに

中島敦の「文字禍」は、『文学界』昭和十七年二月号に、「山月記」と共に「古譚」の総題の下に発表された作品である。

「山月記」とは対照的に、知名度の高くない作品であるが、二種類の草稿が残されているのが特徴である。一つは「文字」という題の付いたもので、もう一つは題の付いていない断片的なもの（創作資料の一つ「ノート第三」に書かれているので、「ノート下書」とする）である。これまでの文学において、その成立過程は次のように捉えられてきた。

・「文字禍」には現在その草稿と考えられる「文字」と更に「文字」の内容をなすと考えられる断片的なキレギレの字句をメモした「ノート」が残されており、この作品が「ノート」↓「文字」↓「文字禍」という順序で制作されたと考えられる。¹⁾（傍線は引用者、以下注記がない限り同じ）

基本的にはこれで良いと思われる。しかし、この作品のもう一つの特徴として、創作資料が多く残っている点が挙げられる。しかも、それは一つに纏まっているのではなく、幾つかの「ノート」や「手帳」に分散しているのである。

これらの成立時期を明らかにしなければ、成立過程を完全に解明した事にはならないのではないか。

本稿では、それらの成立時期を解明することにより、この作品の成立過程が、かなり複雑であることを証明していきたい。

一 「ノート第六」の抜書について

本題に入る前に、創作資料の中でも、特に量の多い「ノート第六」の抜書について、二つの指摘をしたい。一つは、この抜書の原典となった英文資料が、一つだけではない点、もう一つは、抜書が英文資料の頁に則して並んではいない点である。

これまでの研究で、英文資料については、次のような指摘がされている。

・また、『文字禍』についても、同じ「ノート第六」に、ノートを後から使う形で、四七丁裏から一九丁裏に及ぶ資料があり、「ノート第三」にも草稿その他の資料がある。これらを合わせると、先のメモの原典が、²⁾

T. Olmstead/History of Assyria³⁾と判明する。

しかしながら、原典はこれだけではない。創作資料の一つである「手帳（昭和十六年）」の中に、このような記述がある。

• Breasted, J. H. / Ancient Times 7.00⁽⁸⁾

/ Survey of the Ancient World

5.75

/ A History of Egypt 15.75

Budge, Sir E. A. W. / Babylonian Life and

History 5.60

Jastrow, M. / The Civilization of Babylonia and

Ass. 15.00

King, L. W. / A History of B. and A. 2 vol. 30.00

H. G. Rawlingson / Bactria 7.85

Lukenhill, D. D. / Ancient Records of A & B 2vol.

A. A. Sayce / The Hittites 1.75

/ A Primer of Assyriology 1.85

/ Babylonians & Assyrians 3.15

/ Assyria 1.71

Woolley, C. L. / The Sumerians 3.00

Olmstead / History of A.

このリストの最後に、木村氏が既に指摘してある『History of Assyria』(以下『H of A』)の名が見える。しかし、それと共に、同じくこのリストの中に見える『The Civilization of Babylonia and Assyria』(以下『The C of B&A』)と「ノート第六」の抜書と対応する。

それは、四七丁裏から四四丁裏までの抜書である。⁽⁹⁾

また、リストに挙げられている、この他の英文資料については、対応関係はみられなかった。

そして、これ以外の抜書は、全て『H of A』からのものである。しかし、その対応関係を調べていくと、次のような事実が浮かんでくる。

• 612 八月、Nineveh 落城 / Neopolassar Gyaxares にて「⁽¹⁾」(二五丁裏) 六三七頁十九
〜三行目

• 王の服装。 二七九頁十二
〜二四行目

紅玉をちりばめた金の tiara / トルコ帽の如し、縵の代りにスパイク / 後に

紅リボンが長く垂れる / rosette とフチトリのある長い上衣 / 同様の軸のある

ペンント / Sandal with heels / stuff を手にす、 / 耳輪 bead / 腕輪 coiled wire / bracelet-rosette (二五丁表)

(傍線は原文)

このように、二五丁裏の抜書の後にある(「ノート第六」)の抜書は、後から順に並んでいる(二五丁表の抜書が、英文資料の前の頁からの引用と分かる。また、二九丁表と二八丁裏の抜書も同様⁽⁷⁾で、数頁の差のものは、他にも幾つか見られる。つまり、「ノート第六」の抜書は、英文資料の

頁に則して並んではないのである。

では、これは何を意味するのか。抜書の配列に、何らかの意図があったと見る事も可能かもしれない。しかし、それよりも、英文資料を一読しただけではなく、幾度かの読み直しを経て、この抜書集が完成したという事を意味している、と見るべきではないか。最初は、特に注目しなかったが、読み直しをしていく中で、注目し、抜出した。それが、英文資料の頁に則していない配列になっている抜書の成立過程と考えられる。

また、この資料の読み直しという点は、作者の資料に対する〈こだわり〉の表れといえるのではないだろうか。

二 文章化されたものの比較

ここからは、本題の成立過程の解明に入る。まずは、文章化されたものを比較させてみる。

・ ナブ・イクビが、近頃の若い人達の中に敬神の念の薄らいだことを責めた。(「ノート下書」)

・ 「さうですとも。どうも、コトニ這い入る近頃の若い〔者〕人達はとかく、神々への尊信を欠いてゐて〔困るね。いかん〔ね。〕。〔文字〕」

・ 文字の崇の第一はな、〔先づ、〕文字といふ奴〔は眼に〕をみてゐると、文字の影が眼にとびこんで来て、蛆虫

が固い殻を穿つて胡桃の実を〔ほちくる〕くふやうに、眼玉をこまかく蝕むのぢや。わしは、此の間、息子に見えるという空の鷺の姿がどうしても見えなんだ。みんな文字のお蔭ぢや、文字を讀むやうになつてから眼に埃が余計にはひるやうになつたといふ男もおるぞ。(「ノート下書」)

・ 第一に、之は貴方も気づいてをられようが、文字の〔精霊は〕妖精共が、我々の目〔の中に〕を犯すことぢや。丁度殻を穿つて胡桃の実を巧みにくひつくすやうに、文字の精共は我々の眼の中にくひつくす入つて何時の間にか蝕んで了ふ。此の間もマルズック・シャル・ウシユル將軍に見えるといふ空の鷺が、己の眼に見えなんだ。今でも、あの「

・ 「さういへば文字を多く讀むやうになつてから、眼に埃が余計にはひるやうになつたといふ男がゐましたよ。」(以上、「文字」)

・ 第二のたゞりはな、文字の幽霊が何時〔迄〕でも我等につきまとふことぢや。空を見上げて、空とわしとの間に、空といふ字の幽霊が立ちふさがるのぢや。空は、もはや以前程蒼うはないわい。女子を抱いてもな、女といふ字や、肉といふ字の幽霊がつきまとつて邪魔する故、とんと楽しうないわ。まづ、布を隔て、触れ

てをるやうぢやの。(「ノート下書」)

・「全くわしも、文字を覚える以前〔に〕と比べて、今は空がどうも、それ程青う見えんやうに思ふのぢや。」

・女子を抱いても、女といふ字や楽しみといふ字〔が〕の妖精がまとひついて邪魔しをる故とんと楽しいないわ。楽しみといふ字〔が〕先づ〔麻〕布を距て、触れとるやうぢやの。(以上、「文字」)

また、語句の一致は見られないが、影響関係が見られる箇所もある。

・心を愚かにする、身体を鈍くする、獅子といふ字を覚えた代わりにもはや獅子狩りに出る元気もないわ。

・この分では、獅子といふ字を知つてゐるくせに、獅子を見たこともないやうな〔奴〕片輪がでてくるかも知れんぞ(以上、「ノート下書」)

・獅子といふものを考へる〔場合〕にして〔も〕からが、我々には、本物の獅子よりも先に、獅子といふ字が心に浮かんでくるのぢや、だから本物の獅子が実際に目の前に躍出て来たら、我々は「狼狽して」それに応じる途を知らぬ〔のぢや〕し、狼狽して赤子のやうに喰はれて了ふばかりだ。(「文字」)

以上が「ノート下書」と「文字」との対応箇所である。

つまり、これは先行研究の証明に過ぎない。しかし、この「ノート下書」は、「文字禍」とも対応関係がある。

・文字が普及してから／タシカニシヤツクリ〔が〕してゐるものが増えたやうだ(「ノート下書」)

・文字を覚えて以来、咳が出始めたという者、くしやみが出るやうになつて困るといふ者、しやつくりが度々でるやうになつた者、下痢をするやうになつた者なども、かなりの数に上る。(「文字禍」)

・着物が出来て、人間の皮膚が弱く醜くなつたやうに／乗物が出来て、人間の脚が弱く醜くなつたやうに／文字が出来て、人間の頭が弱く醜くなるであらう(「ノート下書」)

・着物を着るやうになつて、人間の皮膚が弱く醜くなつた。乗物が発明されて、人間の脚が弱く醜くなつた。文字が普及して、人間の頭は、最早、働かなくなつたのである。(「文字禍」)

・「何と君は、理クツに合つた説明の好きな男なのだらう。それは一種のやまひぢやな。この世で、そんなに何事にでも辻褄を合わせたがることの中には何かしらをかしな所があるよ。全身垢まみれで、ボロを纏つた男が一ヶ所だけ、例へば足の爪先だけ、むやみに美しく飾つてゐるやう〔に〕な、さういふをかしな所が。

何事で〔に〕もハツキリ辻褃を合わせようなどとは、人間の身を忘れて神々に近づかうとするともんでもない〔増上〕驕慢ぢや。（「ノート下書」）

何事にも辻褃を合わせたがることの中には、何かしらをかきな所がある。全身垢まみれの男が一ヶ所だけ、例えば足の爪先だけ、無闇に美しく飾つてゐるやうな、さういふをかきな所が。彼等は、神秘の雲の中に於ける人間の地位をわきまえぬのぢや。（「文字禍」）

いや、イシュディ・ナブ君が、こんな妙な疑を持つやうになつたのもやはり文字の毒に中つた〔の〕ためかも知れぬ。文字にしたしみすぎて、文字に疑を持つやうになる〔なぞ〕とは、をかしいが、此の間〔も〕、わしは、〔胡桃酒を〕羊の焼肉をむやみに（さう、一人で丁度一匹の羊の半分はくつたかな）くつたら、それから当分の間、野原を歩いている羊の顔を見るのも厭になつたことがあつたからな。（「ノート下書」）

しかし、又、彼等精霊の齋す害も随分ひどい。わしは今それに就いて研究中だが、君が今、歴史を誌した文字に疑を感じるやうになつたのも、つまりは、君が文字に親しみ過ぎて、其の靈の毒氣に中つたためであらう。

文字に親しみ過ぎて却つて文字に疑を抱くことは、決

して矛盾ではない。先日博士は生來の健啖に任せて羊の炙肉を殆ど一頭分も平げたが、その後当分、生きた羊の顔を見るのも厭になつたことがある。（以上、「文字禍」）

このように、量的には「文字」と同じ位の箇所が、「文字禍」と対応する。成立過程が、一直線ではないのは明らかである。

続いて、「ノート第^二八」に書かれてある、断片的な文章（以下、「ノート断片」とする）に注目してみる。本文との対応関係は、次のようになってゐる。

・ 図書館の夜、サワガシイとの噂、
舌ヲヌカレタ靈ハシャベルマイ

ベルノマルズク神でもあるよ／威力ハシレタモノ
分ルキヘキ

単々直線のあつまりが音や意味をもつに至れるハ何ゾヤ／靈アリテ之をスブルガ故ノミ／人間の手、足、耳
——をスブル靈アル如ク、／又字ハ子ヲウム、枝ヲノ
バシ、根ヲハル／人間がツクルニアラズ、種子ヲマイ
テ芽ノデルノミ／人間之を扶ルニスギズ／神業ナル如
シ（「ノート断片」）

・ 毎夜、図書館の闇の中で、ひそく／と怪しい話し声があるといふ。

・舌の無い死霊に、しゃべれる訳がない。

・人間の日常の営み、凡ての習慣が、同じ奇体な分析病のために、全然今迄の意味を失つて了つた。

・魂によつて統べられない手・脚・頭・爪・腹等が、人間でないやうに、一つの霊が之を統べるのでなくて、どうして単なる線の集合が、音と意味とを有つことが出来ようか。

・文字の精霊の数は、地上の事物の数程多い、文字の精霊は野鼠のやうに仔を産んで殖える。

(以上、「文字禍」)

このように、「ノート断片」は「文字禍」との対応関係のみである。それは、この「ノート断片」が、同じく断片的なものである「ノート下書」とは、成立時期が異なる事を意味する、といえよう。

三 創作資料の成立時期

前章において、成立過程が単純な一直線とは考えられない点を指摘した。ここでは、それを念頭に置きながら、様々な創作資料の成立時期を確定していく。

まず考えられるのは、英文資料から、「ノート第三」^③と「ノート第六」の抜書集、という流れである。しかしながら、この二つの抜書集が同時期に成立したとは考えにくい。

前章で「ノート第三」中にある「ノート下書」と、「ノート第六」中にある「ノート断片」が、同時期に成立したとは考えにくい点を指摘したが、それに加えて、「ノート第三」の抜書集の中で、明らかに本文との対応関係があるといえるのは、次の二つだけという点も、これを裏付けるものである。

・ Adad-nirari IV (812-783) \ Adad 后^④ Sammuramat (Semiramis?)

・ 彼は、アダッド・ニラリ王の後、サムムラマトがどんな衣裳を好んだかも知つてゐる。(「文字禍」)

・ Tukulti (in-Aristi) Ninib I \ バビロンに侵入、Bitiyas 王を殺す。

・ 彼はツクルチ・ニニブ一世王の治世第何年目の何月何日の天候まで知つてゐる。(「文字禍」)

ちなみに、この二人の名前は、「ノート第六」の抜書集にも見える。

・ Adad-nirari (812-782) (その初めは母の Sammuramat が治める) (Semiramis)

・ tukulti-urta I (1282)

しかし、こちらでは、サムムラマトがアダッド・ニラリ王の「后」ではなく「母」であり、ツクルチ・ニニブ王に至っては、名前が異なっている。従つて、この二人は、

「ノート第三」の抜書からの引用といえる。

そして、この二人は、共に「文字禍」で初めて引用されている。更に「ノート第三」の配列を見てみると、一丁裏から八丁裏が「ノート下書」、九丁表から三二丁裏が「文字」、そして三七丁裏から三四丁表（逆から使用している）が抜書集となっている。

これらの点を踏まえると、「ノート第三」の抜書集は、「文字」執筆後に成立した、と考えられる。一方、「ノート第六」の抜書集は、詳細については省略するが、「ノート下書」「文字」「文字禍」のいずれとも対応関係がある。従って、やはり「ノート下書」執筆以前の成立と考えられる。続いて「手帳」を見てみる。第一章で、ここに書かれてある英文の本のリストについて触れたが、それと同じ昭和十六年の「手帳」に、次のような英文がある。

- Jupiter enters Orion the gods are angry to the land.
 - Jupiter is seen in June. that means evil to the land.
 - Shamash in the way of Ann (dissipating its gleam) means fatal to Elam.
- これは、『H to A』三八七頁の次の箇所と対応する。

- "Shamash in the way of Anu dissipates his brilliance, this means evil to Elam."
- "If Jupiter is seen in June there be evil for the land,

grain will be dear. If Jupiter enters Orion, the gods will rage against the land."⁽⁹⁾

では、この英文も含め、「手帳」の創作資料は、どの時点で成立したのか。まず、もう一度英文資料のリストに注目すると、ここで挙げられている資料の中で、「ノート第三」の抜書集の原典となっているものが存在しない、という事実がある。

更に、本文との対応関係を見てみると、「Jupiter enters Orion the gods are angry to the land.」が、次の箇所と対応する。

・大マルドゥック（の）星（木星）が〔参宿〕『天界の真の牧羊者』（オリオン）の境を犯せば、神々の怒りが降る（「文字」）

それに、当然ながら「ノート第六」の抜書集には、「手帳」の英文と同じものは見られない。従って、この「手帳」中の創作資料の成立は、「ノート下書」成立後、「文字」成立前と考えられる。

四 創作資料の度重なる見直し

前章で、創作資料は全て取り上げたが、ここで再び「ノート第六」の抜書集に注目する。何故ならば、「文字」とのみ対応する抜書「文字禍」とのみ対応する抜書が存在す

るからである。それは、「文字」「文字禍」執筆時に、もう一度「ノート第六」の抜書集を見直して、引用している事に他ならない。それぞれの対応関係は次のようになってゐる。

←1・「文字」

- 蠅弘の扠子（二八丁裏）
- ・三人ともに、巨眼、長髯、縮髪で、長衣を纏ひ、いづれも、扠子を片手に蠅を追「ふてゐる。」のに忙しう。
- ・図書館は、Sennacherib 宮（A. B. P が幼時を送った）にあり。Tep Humban 敗亡の図 Shamash-shum-ukin の乱の頃のその宮殿廢れたので、之を復旧す、その近くに新宮を営む、Sirara, Lebanon の杉材で屋根、bronze-covered door 香高キ Haruocder。（二九丁裏）
- ・この王立図書館は、（それは、それから二百年後には「既に」もはや地下に埋もれて了ひ、漸く二千五百年後になって偶然発掘される運命を持つ「た」べきものであったが）現王の祖父に当る、かの武勇絶倫のセンナケリブ王の故宮（今の大王が、御幼少の折の楽しき日々を過ごされた由緒深き建物である。）の「中に設けられてゐる。それ故、」一部にある。庭の樹々の間からは、直ぐ北に聳える新築のアシユル・パニ・アパ

ル大王の宮殿が隱見する。シララ山やレバノン山から運んだ香高き杉「材の角に」の屋根の角々に、金銀の飾り「をまきちらした其の屋根が隱見するのである。眩く日に」がまばゆく陽に輝いてゐる。

- ・向ひ側の雪花石膏の浮彫を指して、「我が大王の軍隊に蹴ちらされるテップ・フンパン麾下の一人々々が、どうも私の目には、はつきりとは見えかねるのぢや。」
- ・688 七月半。子供の肉を喰ふに至る、／馬具の革を噛む、
- ・餓死体、満市疫病。（以上、三三丁裏（傍線は原文）
- ・天文学者「老儒官」「しかし何ですな。陥落した時のバビロン市内の有様も実にひどかつたといふではありませんか。餓死々体が何万ともしれなかつたとか」
- ・老儒官「それに、疫病がひどかつたといひますよ。何しろ、最後の半年ほどは、食糧難で、死体を食べたり、馬具の革をかじつたりしてををつたんだから」
- ・Marduk-shar-usur 將軍 / Eiam (Imigash 王の) に敗れる、捕へらる（三四丁裏）
- ・此の間もマルズック・シャル・ウシユル將軍に見えるといふ空の鷲が、己の眼に見えなんだ。
- ・「おゝ、ギルガメシユ、」などで斯くは悶ゆるぞ。永遠の生命をな求めそ。そは神々のものなるを。おお汝、

ギルガメシュ、汝の腹〔を充せかし〕〔常にみち足り〕を常に見たしめ、一日〔毎に〕一日を楽しく遊び、日も夜も〔楽しく〕衣服〔を〕も清らに、沐浴を忘れず、汝を慕ふ子をいつくしみ、汝が愛する妻を抱け……

(対応する英文は、注6にあり)

・Bel-shunu (Bel-ibni の弟) / Elam に捕〔へ〕られた
／を迎へに Nabu-abe-eriba が行へ (三二丁裏)

・たゞ、大王の幼時からの師傳ナブ・アヘ・エリバに對してだけは流石にお咎め〔は〕がな〔く、久しくエラム国に捕はれてゐたベル・シユヌを遙々迎へに行くといふ、老人としては少々骨の折れる役を仰せつかつただけであつた。〕かつたが、しかし、彼とて文字の崇りを免れた訳ではない。

・書記生。

Atar-gannu → Samaku を殺す

の息子

娘 Sahish を Shamash-shum-ukin に与ふ。(一九丁表)

・当時の習慣では、○○○息子が○○○の娘を殺すなり奴隷にするなりすべきであるのに、○○○息子はそのどちらをも肯せず、仇敵の娘を妻にしたいといひ出し

たのであつた。ソレヲ○○○の親戚が訴へ出たのであつた。裁判官はもとよりニネヴェ全市がアツと驚いた。こ〔の〕んな例は未だかつてなかつたから。みんな、父親の死によつてその息子〔は〕の氣が変になつたのだと考へた。

〈2・「文字禍」〉

・夜、闇の中を跳梁するリル、その雌リリツ、疫病をふり撒くナムタル、死者の靈エティンム、誘拐者ラパス等、数知れぬ悪靈共がアッシリヤの空に充ち満ちてゐる。(対応する英文は、注6にあり)

・351. 三月末、／羊肝ト、凶 (三三丁裏)

・星占や羊肝トで空しく探索した後、之はどうしても書物共或ひは文字共の話し声と考えるより外はなくなつた。

・○獅子の足が机の足 (二八丁裏)

・老博士の卓子(その脚には、本物の獅子の足が、爪さへ其の儘に使はれてゐる)の上には、毎日、累々たる瓦の山がうづたかく積まれた。

更に、創作資料の見直しはこれだけではない。作者は、英文資料そのものも、見直している。それは、「ノート下書」「文字」「文字禍」中に、抜書集には見られないにもか

かわらず、英文資料と対応する箇所が存在するところ、うか
ら考えられる所である。

＜一・「ノート」書＞

- The Hebrew tribal and early identified with the Baals, the agricultural lords of fertility, as Marduk of Babylon became the Bel, the lord, par excellence. (『H of A』六一六頁三二六行目)
- 凡て榮しうごとの後には、ろくな事はならわ。毎年ナル神の犠牲なる男共のことを考えてまじ。

＜二・「文書」＞

- Babylonian and Assyrian rulers from the oldest to the latest period include Shamash in the invocations to the chief gods of the pantheon at the beginning of votive or historical inscriptions. So, to give an example of the early period, Lugalagizi, the king of Uruk (c. 2750 b. c.), designates himself in the introduction to one of his inscriptions as

“The great *patesi* of Enlil, endowed with under-
standing by Ea, Whose name was called by Babbar

(i.e., Shamash), the chief minister of Sin, the lieutenant of Babbar, the provider for Innina, the child of Nisaba, nourished with the milk of Ninkharsag, the servant of Mes, the priest of Uruk.”

(『The C of B&A』1101頁十一二六行目)

- [古代シマメエ語のキルガメッシュ訳] ルガン・ギキミン王のエンリルに捧げた祈禱文集の古代シマメル語とそのアッカド語訳を比較校訂してゐた老儒ナブ・マハ・エリバ〔は〕が静かに粘土板を置き、二人に向つて話しかけ〔た〕る。

- Across the front stood five pair of Bull colossi, twenty feet long and as many high, which formed the Jamb. Unlike the bulls from the earlier periods, but four feet are shown. The bread, the body hair, the plaited tail, and the triple wings are mae with the utmost attention to detail. (『H of A』三三三頁十一一十六行目)

• 老人は部屋(¹⁰)の入口〔に立つ〕の巨大な翼牛(翼をもつ人面の牡牛の)像のあたり(¹⁰)に目をやりながら、ゆくゆく(¹⁰)と歩く〜話して行つた。

- Assyrian art found its highest expression in his bas-reliefs; they for a mile along the walls of Sargon's

place, and their beauty is undeniable. A new ex-

periment, or rather, the revival of an older method under the influence of Hittite Carchimish, was attempted, the use of basalt for the oversoft alabaster, but it was soon abandoned. ([H of A] 二八〇頁上〜一二三行目)

• 向ひ側の雪花石膏の浮彫(びん)を指しつゝ

• The great antiquity of Sippar is vouched for the results of excavations conducted on the site, but it is still open question whether another seat of Shamash worship at Larsa is not even older. we must, at all events, assume some relationship between the two centers, for in both places the names given to the patron deity and to his temple, E-Babbar ("resplendent house"), are identical. ([The C of B&A] 二一〇頁十六〜二三行目)

• あの老人はさううら「ふんだよ。」[手にした、]ひながら、ラルサなる「太陽の家」に捧げた古スメリヤ人の献辞の写本を取上げると、頬ずりをし、それをペロ〜と舐め出すんだよ。驚いたね、之には」

〈30〉「文字」「文字禍」共通

• Whatever evil there in it refers to Amurru, tomorrow the report of the moon's eclipse will be sent. ([H of A] 三三八頁十五〜十六行目)

• 月輪の上部に蝕が現れば、アモル人が禍を蒙ることも、みな古書に書かれてあればこそです。〔「文字」〕

• 月輪の上部に蝕が現れば、フモオル人が禍を蒙るのも、皆、古書に文字として誌(し)かれておればじやぢや。〔「文字禍」〕

• Nabu was the god of wisdom, he was also the god of the Borsippa which had been eclipsed by the fame of Babylon as Nabu had been eclipsed by Marduk: ([H of A] 四七一頁三〇〜三三行目)

• 「ホルシツプなる明知の神ナブウの使ひ姫たる文字の威力を、——イシュディ・ナブよ、君はまだ充分には悟つてゐなかつた訳(ですな)。だね。〔「文字」〕」

• ホルシツプなる明智の神ナブウの召使ひ給ふ文字の精霊共の恐ろしい力を、イシュディ・ナブよ、君はまだ知らぬと見えるな。〔「文字禍」〕

〈4〉「文字禍」

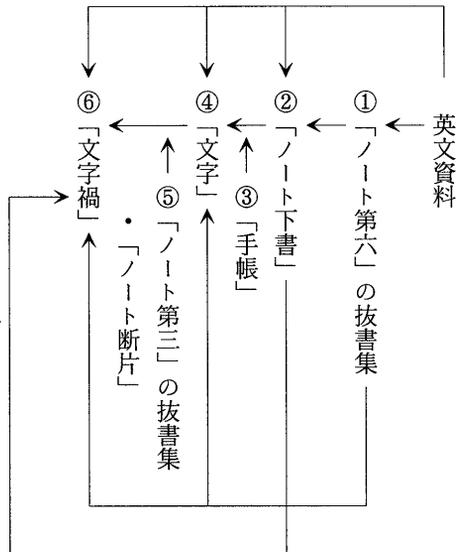
• Incorporated in this was the story of the world

Flood, which, starting from Babylonia and closely copied in Palestine, followed the south of Asia, crossed the Pacific by its chain of island, and divided into both North and South America. Two widely differing stories had been incorporated in the epic, one from Shuruppak, whose hero was Atrahasis, the other centering about Pir-na-pi-shutulim of Sipper. The Assyrian addition was characteristic. (『H of A』五八六頁六〜十三行目)

以上は、作者が改稿の際に、抜書集、そしてそれと共に、英文資料そのものを、もう一度見直した事を意味しているにはかならない。従って、第一章で指摘した「ノート第六」の抜書集における、英文資料の読み直しと同様に、作者の資料に対する、〈こだわり〉の表れといえるのではないだろうか。

おわりに

以上、比較を中心として、成立過程について論じてきたが、整理すると、次のようになる。



定稿「文字稿」成立までには、このような紆余曲折があったと考えられる。本稿では、この点と、作者の資料に対する〈こだわり〉を指摘するのみであるが、作品そのものにアプローチする際には、考慮する必要がある点ではないだろうか。

(注)

(1) 鷺只雄「古譚——物語の饗宴」(『言語と文芸』五〇号昭和四二年一月)

(2) 木村東吉「古譚」成立期考(『日本文学』二九卷七号昭和

五十五年七尺J)

(3) いろいろの数字は、値段かと思われぬが、また確証は得られ
てゐない。

(4) 龍谷大学図書館蔵

(5) 右画

(6) 具體的な対応頁は次のようになつてゐる。

• Sabitu speaks to him, to Gilgamesh,
'O Gilgamesh, why dost thou run in
all directions?

The Life that speakest thou wilt not
find.

When the gods created mankind,
They determined death for mankind;
Life they kept in their hands.

Thou, O Gilgamesh, fill thy belly,
Dan and night be thou merry,

Daily arrange a merry-making,
Day and night be joyous and content.

Let thy garments be pure,
The head he washed, wash thyself
with water!

Regard the little one who takes hold
of thy hand,

Enjoy the wife (lying) in thy bosom."

(四十一一) 圖

• "The transgression that I have com-
mitted, I know not,

The sin that I have committed I know
not,

The unclean that I have eaten I know
not,

The impure of which I have trodden I
know not,

The Lord in anger of his heart has
looked on me,

I sought for help, but no one took me
by the hand,

Mankind is stubborn, no one has
understanding.

O Lord, do not cast thy servant
into the waters of the marsh! Take
hold of his Land! (四十一一) 圖

• Seven, they are they seven,
In the deep they are seven,
Setting in heaven they are seven,

In a section of the deep they were, nu
rtured;

Neither male nor female are they,
Destructive whirlwinds are they,
They have no wife, they produce no o
ffsprings.

Mercy and pity they know not,

四六二頁十七
〜四六三頁三
行四

四十一一頁一〜
四十二頁四

四七三頁十一
行四

四七三頁三三
〜四七四頁一
行四

一一三頁十三
〜一一四頁

Prayer and petition they hear not,

” ” (四五丁裏)

• 'He stands at the side of a man, without anyone seeing him,

He sits at the side of a man, without

anyone seeing him,

He enters a house without anyone

seeing him,

He leaves a house without anyone

seeing him

Rabisu (lying-in-wait)

Labasu (overthrower)

Lilu (Lilitu 難) (nightspirit)

Erimmu (deadman's ghost)

Namtar (pestilence) (四四丁裏)

(7) 二九丁表の抜書は、五四九頁十三〜二二行目からの引用で、

二八丁裏は、五〇二頁十六〜十九、二八〜三〇、三三〜三四行目からの引用である。

(8) 「ノート第三」の抜書集の原典はまだ不明である。現在、

判明しているのは「Bel-kudurrū-ussur」や「Bel-kudur-

uzur」や「Asur-nassir-apal」や「Assur nazil-pal」

というように同一人物を指すと考えられるにもかかわらず、

綴りの違うものの存在から、少なくとも二種類の原典で構成

されている事、又「sohn」「das」というドイツ語表記があ

り、従ってその一つは、ドイツ語の資料と考えられる点で

二四四頁十九
〜二二行目

二四三頁一〜
六行目

ある。

(9) この微妙な改変にも、何らかの意図があると考えられるが、まだ結論を出すには至っていない。

(10) 同頁に、「巨大な翼牛」の運搬の様子が描かれたイラストがある。又、他の箇所にも記述が見られ、アッシリアの代表的な建造物と考えられる。

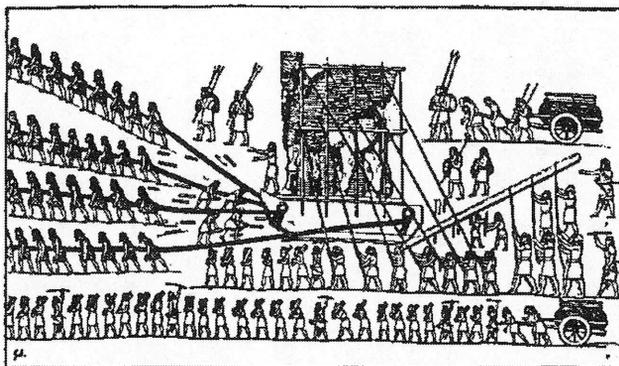


FIG. 129. TRANSPORTATION OF THE HUMAN-HEADED BULL.

(11) (10)と同様に、他に何箇所か記述があり、アッシリアの代表的な美術と考えられる。

(12) 初出の『文学界』では、「アモオル人」。初版本の『光と風と夢』において、誤植が発生している。ここでは、『中島敦全集』の本文に依った。